事後評価報告書

2023 年 3 月 10 日(金)

1.　基本情報

1.1.　実行団体名

NPO 人権尊重の矢田まちづくり委員会

1.2.　実行団体事業名

矢田地域安心安全のまちづくり　～居場所と生きがい創造事業～

1.3.　資金分配団体名

一般社団法人　大阪府地域支援人権金融公社

1.4.　資金分配団体事業名

ひと・まち・げんき助成事業

1.5.　事業の種類

草の根活動支援事業

1.6.　実施期間

自 2020 年 4 月 1 日，至 2023 年 3 月 31 日

1.7.　事業対象地域

矢田 5・6 丁目

2.　事業概要

2.1.　解決を目指す社会課題

同和対策特別措置法が失効し，同和対策事業で建設された施設が廃止，そのサービスも打ち切られてきた。一方，地区住民の高齢化が著しく高まるとともに，貧困に伴う生活不安や孤独感も大きくなってきていた。また，このような生活上の不安や困難を気安く相談する機会や，自分の居場所的な空間や出番も減少，こうした背景から，地域のつながり（コミュニティ）が弱くなり，まつりなど生活文化や社会活動への自発的な意欲自体が減退していた。

2.2.　想定される直接対象グループ

矢田 5・6 丁目の公営住宅の住居者（約 1,000 人），およびその周辺の住民と関係機関スタ

ッフ（約 300 人）。

2.3.　中長期アウトカム

Ⅰ　医療生協や社会福祉法人など地域団体が有機的につながり制度の狭間をつくらず，すべての人が支え支えられながら生活できる（社会的に包摂された）地域の実現。

Ⅱ　住民一人ひとりの居場所と生きがいを感じられるまちの実現。

2.4.　短期アウトカム（変更後）

2.4.1.　i　“こんな矢田にしたいな”資源マップづくり

地域住民	(ア)地域への思いを共有する (イ)住民の多様な暮らしに気づく
地域団体やそのスタッフ	(ウ)住民が地域団体の活動を知る (エ)地域団体の相互理解が深まる (オ)矢田をどんな地域にしたいのかという共通認識ができる

2.4.2.　ii　古民家を活用した居場所づくり　～住民や地域で働く人が出会う場所～

地域住民	(ア)地域住民の居場所になる (イ)古民家が出会いの場となる (ウ)役割を担う地域住民が登場する
地域団体やそのスタッフ	(エ)住民と地域団体のスタッフの関係性が深まる (オ)地域団体のスタッフが出会い，相互理解が深まる

2.4.3.　iii　居場所を活用した相談事業

地域住民	(ア)住民にとって何でも話せる場に (イ)話を聴いてくれる人がいる (ウ)相談につながる住民が増える
地域団体やそのスタッフ	(エ)住民の暮らしへの理解が深まる (オ)住民のつぶやきから困りごと，ニーズに気づく

2.4.4.　iv　「杵柄」発掘による人材活用

地域住民	(ア)住民の経験や特技を活かせる場(舞台)ができる (イ)生きがいを感じる住民が増える (ウ)「受け手」と「支え手」の相互関係が深まる
地域団体やそのスタッフ	(エ)サービス利用者の可能性に気づく (オ)住民の役割づくりの大切さに気づく

2.4.5.　v　新型コロナウイルス感染拡大に対応した体制づくり

地域住民	(ア)スマホや LINE を活用する住民が増える (イ)新しいつながり方が孤独解消につながる
地域団体や そのスタッフ	(ウ)コロナ禍の地域課題に気づく (エ)寄り添いに創意工夫がなされる

2.5.　短期アウトカム（計画当初）

i　住民自ら参画し，みんなにとっての居場所づくりがはじまる。

ii　みんなの力で整備された居場所で気軽につどい，それぞれ好きなことを話題に話と笑顔が絶えない。

iii　住民自らが自主的に居場所の運営の仕方を考え，運営をはじめる

iv　自主サークルなどの団体による活動が活発的になる。

v　居場所で話ししているうちに，家族のことや心配事などを，定期的に来ている看護師，保健師やケースワーカーに相談するようになっている。

vi　ワークショップや居場所で知り合った人同士で，独居高齢者の見守りや子ども食堂，まつりなどの自発的なまちづくり活動に参加する人が増えてきている。

2.6.　出口戦略

この 3 年間は助成金によって，活動に伴う人件費などの諸経費を賄うことができた。しかし，4 月以降における出口戦略の主たる方法については，目処は立っていない。これまで参加費無料で実施していたイベントの有料化や，新たな助成金の獲得など，資金調達に取り組む必要がある。

3.　事業実績

3.1.　インプット

3.1.1.　人材

内部 8 名（うち担当者 2 名），外部 10 名（うち専門家 6 名）。

NPO 職員 2 名

地区内関係各組織から 6 名（社会福祉法人，生活協同組合など）

外部，学識経験者（大学や教育関係者），弁護士，医師，先進地区のスーパーバイザー

3.1.2.　資機材

活動拠点（居場所）となる古民家の改修

3.1.3.　経費実績

助成金として〇〇〇〇円を受領した。契約当初は〇〇〇〇円を計画し，実際に〇〇〇〇円

を投入した。

3.1.4.　自己資金

契約当初は〇〇〇〇円を計画し，実際に〇〇〇〇円を投入した。なお，資金調達に際しては，〇〇〇〇を工夫した。

3.2.　主な活動

地域で活用してほしいと寄贈された私邸の古民家（築 100 年以上で，長らく空き家であった）を整備し，地域住民および地域で働く職員にとっての居場所として開放。〈ふれあい食堂〉をはじめとした取り組みを通じて，地域住民らにとっての自己有用感や住民自治の礎となる“出番”の創出，また，地域関係機関が有機的につながり多機関連携による地域共生社会の実現を目指した。

3.3.　アウトプットの実績

3.3.1.　居場所改修ワークショップの開催

指標……(a)　ワークショップの開催数　　(b)　参加者数
初期値……0（新規事業）
目標値……(a)　1 回／月　　(b)　5 人／回
目標達成時期……2020 年度中
実績値……20 回（清掃や片付けも含む）×5 人，のべ 100 人。

3.3.2.　寄付された私邸を改修整備し，居場所として活用できるようになり，人が集まる

指標……参加者数
初期値……0（新規事業）
目標値……20 人／月
目標達成時期……2022 年度中
実績値……30 人×週 1 回（ふれあい食堂）×年間 48 回，のべ 1,440 人。

3.3.3.　高齢者の困りごと，望ましい場所や相談の在り方の把握

指標……地域住民への聞き取り数
初期値……0（新規事業）
目標値……10 人
目標達成時期……2020 年度中
実績値……10 人×10 回，のべ 100 人。

3.3.4.　地域関係団体間で連携して，新たな居場所での相談事業会の実施

指標……相談員の派遣
初期値……0（新規事業）
目標値……1 回／週
目標達成時期……2021 年度中
実績値……相談会の実施は出来なかったが，つぶやき（相談）から，各専門機関で社会福祉法人，診療所，地域包括などに誘導，コロナ関連の手続きも含め，のべ 20 例。

3.3.5.　矢田の歴史，ライフヒストリーを知る

指標……地域住民への聞き取り数
初期値……0（新規事業）
目標値……10 人
目標達成時期……2020 年度中
実績値……10 人×3 回，のべ 30 人。

3.3.6.　矢田の生活文化の復活のためのアイディアや「昔取った杵柄」人材の発掘

指標……新規の生活文化アイディア事業の実施
初期値……0（新規事業）
目標値……1
目標達成時期……2021 年度中
実績値……ふれあい食堂のボランティアとして，元給食調理員による調理補助，ヘルパー元保育士による室内装飾，DIY が得意な住民が自ら工具を持参して階段の手すりを設置など。人材発掘 15 人。

3.4.　外部との連携の実績

大阪市立大学（現 大阪公立大学）との連携。経済学部の専門科目「イノベーティブワークショップ」において，社会的起業演習の題材として矢田地域を取り上げてもらった。授業が修了した後も，参加した学生らがイベントにボランティアとして参加しただけでなく，若者らしい発想による新事業の提案などフィードバックがあった。

社会福祉法人や生活協同組合など事業体にとって，当 NPO 法人と連携することにより多機関連携の萌芽を認識してもらい，その結果として，それぞれの法人にとってもプラスの作用があることを実感してもらえるよう工夫した。

4.　事後評価

4.1.　短期アウトカムの評価結果

4.1.1.　“こんな矢田にしたいな”資源マップづくり

評価方法	定性的評価
調査方法	ワークショップ，面接による聴取
実施期間	2022 年 4 月～2023 年 3 月
対象者	地域住民，地域団体やそのスタッフ
評価結果	(ア)地域への思いを共有する 矢田地域の《見える化》ワークショップを実施。矢田地域への思いを言語化することによって，矢田地域の「強み」「弱み」「欲しいもの」「やりたいこと」などの意識共有ができた。 (イ)住民の多様な暮らしに気づく 矢田地域には，高齢者やひとり暮らしが多く，子どもや若者が少ないこと，地域の魅力や歴史を知らない人が相対的に増えてきていることなど，新たな気付きがあった。 (ウ)住民が地域団体の活動を知る ここに書く (エ)地域団体の相互理解が深まる 地域団体や地域資源の交流を進めてきたが，資源マップの作成を通じて，スタッフ全員で活動内容や提供サービスを再確認できた。 (オ)矢田をどんな地域にしたいのかという共通認識ができる 今までには「何となくそうだよね」と思っていたことが，下記のような言語化された地域像として共通認識できるようになった。 ● 地域外の人がたくさん訪れる地域にしたい ● 「矢田といえば〇〇」という名物が欲しい ● 一人一芸など色々な人が活躍する地域にしたい ● 子どもの居場所がほしい ● 買い物できるところがもっとほしい ● お洒落なカフェやベーカリーが欲しい

4.1.2.　古民家を活用した居場所づくり　～住民や地域で働く人が出会う場所～

評価方法	定性的評価
調査方法	〈ふれあい食堂〉参加者などへの聴取
実施期間	2022 年 3 月～2023 年 2 月
対象者	地域住民，地域団体やそのスタッフ
評価結果	地域住民 (ア)地域住民の居場所になる 〈ふれあい食堂〉の実施により，一人暮らしの高齢者の孤食の防止になり，「薄くなっていた曜日感覚が戻ってきて，毎週金曜日の食

	事が楽しみになった」という声も聞かれた。〈パン教室〉や〈カフェ〉などの単体の企画も好評で，参加者からは「今後も定期的に古民家で催事をしてほしい」という要望があった。古民家が地域住民にとってのサードプレイスとして着実に認知されてきている。 (イ)古民家が出会いの場となる 〈ふれあい食堂〉を通じて参加者の地域住民同士が知り合い，世間話による調理法や地域情報の交換がなされるようになった。また，近隣の大阪公立大学の学生と地域住民との間でも交流が生まれ，〈ふれあいコンサート〉などの新しいイベントが実現するきっかけとなった。 (ウ)役割を担う地域住民が登場する 〈ふれあい食堂〉の開始以降，当初は喫食するのみであった参加者が，回を重ねるごとに次第に「自分のできること」を探し始め，清掃，調理，配膳，食器洗いなどの役割を見つけて自ら進んで行動する参加者が増加した。また，自家栽培の野菜や使用しなくなった調理器具の寄付などを通じて，古民家での活動に寄与する参加者も見られるようになった。
	地域団体やそのスタッフ (エ)住民と地域団体のスタッフの関係性が深まる (実例，エピソードを評価として記述) (オ)地域団体のスタッフが出会い，相互理解が深まる (実例，エピソードを評価として記述)

4.1.3.　居場所を活用した相談事業

評価方法	定性的評価
調査方法	〈ふれあい食堂〉参加者などへの聴取
実施期間	2022 年 3 月～2023 年 2 月
対象者	地域住民，地域団体やそのスタッフ
評価結果	地域住民 (ア)住民にとって何でも話せる場に (実例，エピソードを評価として記述) (イ)話を聴いてくれる人がいる (実例，エピソードを評価として記述) (ウ)相談につながる住民が増える (実例，エピソードを評価として記述)
	地域団体やそのスタッフ

	(エ)住民の暮らしへの理解が深まる (実例，エピソードを評価として記述) (オ)住民のつぶやきから困りごと，ニーズに気づく (実例，エピソードを評価として記述)

4.1.4.　「杵柄」発掘による人材活用

評価方法	定性的評価
調査方法	〈ふれあい食堂〉参加者やボランティアなどへの聴取
実施期間	2020 年 4 月～2023 年 2 月
対象者	地域住民，地域団体やそのスタッフ
評価結果	地域住民 (ア)住民の経験や特技を活かせる場(舞台)ができる 〈ふれあい食堂〉に元給食調理員や元保育士のヘルパーの地域住民らがボランティアとしてほぼ毎回参加するようになり，調理補助や室内装飾を行うようになった。〈ふれあい食堂〉の 1 日担当の希望を申し出て，自ら献立を考えて当日の運営を統括する参加者も現れた。また，DIY が得意な住民が，自ら工具を持参して古民家内の階段の手すりを設置した。 (イ)生きがいを感じる住民が増える (実例，エピソードを評価として記述) (ウ)「受け手」と「支え手」の相互関係が深まる (実例，エピソードを評価として記述)
	地域団体やそのスタッフ (エ)サービス利用者の可能性に気づく (実例，エピソードを評価として記述) (オ)住民の役割づくりの大切さに気づく (実例，エピソードを評価として記述)

4.1.5.　新型コロナウイルス感染拡大に対応した体制づくり

評価方法	定量的評価および定性的評価
調査方法	2021 年度に実施した「新型コロナウイルス感染症流行における暮らしアンケート調査」の分析，ワークショップ，面接による聴取
実施期間	2021 年 3～4 月
対象者	地域住民，地域団体やそのスタッフ
評価結果	地域住民 (ア)スマホや LINE を活用する住民が増える

	（実例，エピソードを評価として記述） （イ）新しいつながり方が孤独解消につながる （実例，エピソードを評価として記述）
	地域団体やそのスタッフ （ウ）コロナ禍の地域課題に気づく 「外出や会話の機会が減った」「不安やストレスが増えた」など，コロナ禍による不安や暮らしの変化を訴える人が多く，新しいつながり方として注目されている SNS やスマートフォンを有効に活用できている人が少ない。 （エ）寄り添いに創意工夫がなされる （実例，エピソードを評価として記述）

4.2.　アウトカム達成度についての評価

古民家を活用した〈ふれあい食堂〉が，閉じこもりがちなる団地居住者にとっての居場所として機能し，一人暮らしの高齢者をはじめとした孤食の防止，地域住民の交流の促進，古民家を訪れる人々との新たな出会いを生み出した。

また，〈ふれあい食堂〉を通じた“出番”の創出も見られた。開始当初は喫食するだけであった参加者が，回を重ねるごとに「自分のできること」を探し始め，清掃，調理，配膳，食器洗いなどの役割を見つけ始めた。支えられるだけの存在であった住民らの中に支え合うという新たな関係性が芽生え始めてきた。

加えて，地域内で勤務する福祉医療関係スタッフが〈ふれあい食堂〉などのイベントを目的に古民家に“遊びに来る”ことによって，地域住民との関係が「支え手 ― 受け手」という関係にとどまらず，人と人との新たな関係性の芽生えにつながっている。

以上のことからも，中長期アウトカムで設定した下記の両項目について，達成される可能性が見えてきた。

Ⅰ　医療生協や社会福祉法人などの地域団体が有機的につながり制度の狭間をつくらず，すべての人が支え支えられながら生活できる（社会的に包摂された）地域の実現。

Ⅱ　住民一人ひとりの居場所と生きがいを感じられるまちの実現。

~~4.3.　波及効果~~

~~ここに書く~~

~~4.4.　事業の効率性~~

~~包括的な支援プログラムとして資源の有効活用や費用対効果について検証。~~

5.　~~要因および~~今後の課題

今後の課題として，WAM に申請している事業内容を簡潔に書く

~~5.1.　社会課題解決に貢献したアウトカムについて~~

~~ここに書く~~

~~5.2.　達成が困難であったアウトカムについて~~

~~ここに書く~~

~~5.3.　その他の検証項目~~

~~ここに書く~~

~~重要・有益だと思うことを，より深掘りして検証を行った事項があれば，その内容を記載。~~

6.　結論

6.1.　事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	(1)事業実施プロセス	(2)事業成果の達成度
多くの改善の余地がある		
想定した水準までに少し改善点がある		
想定した水準にあるが一部改善点がある	✓	✓
想定した水準にある		
想定した水準以上にある		

当てはまるレベルにチェック✓を入れる

6.2.　事業実施の妥当性

ここに書く

重要と思われる点や特筆すべき点を根拠として自由記載。

契約当初の総事業費から数百万円規模で増額・減額している場合や，アウトカム変更を行っている場合には，その変更の妥当性についても自己評価結果を記載。

~~7.　提言~~

~~ここに書く~~

~~評価結果に基づき事業を継続していく上で，役立つ提案・助言を記載。~~

~~本事業をどのように持続・発展させるか，休眠預金に依存せずに自走化させる戦略とその実施状況等を記載。~~

~~8.　知見および教訓~~

~~ここに書く~~

~~事業の経験や学びから類似課題への取組みに参考とできる具体的な教訓~~

9. 資料

- 事前評価報告後に見直した事業計画やロジックモデル
- 事後評価報告時の事業計画やロジックモデル
- 事業の様子がわかる写真資料（公開可能なもの）
- 広報活動の成果品，報道された記事
- アンケート調査結果や実際に使用した調査票
- とりまとめられた白書
- 論文，学会発表資料
- 特許